

「キリストから始まる新しい人生」

主任牧師：重田 稔仁

<メッセージ>

マルコによる福音書 1章 16～20 節

人生には様々な出会いがあると思いますが、一つ言えることは出会いは良くも悪くも人生を変えます。そんな出会いが皆さんにもきっとあると思いますが。

この人と出会って人生の新しいステージの幕が上がった、新しい世界が開けたと感謝しても仕切れない方々が私にもたくさんいます。その中でも最大の出会いは、イエス様との出会いです。イエス様との出会いは私の人生を決定的に変えただけでなく、イエス様によって多くの出会いに導かれました。それはイエス様が私を、私に、紹介して下さった人々との出会いです。違う言い方をすると、クリスチャンになったからこそ出会えた人たちが数えきれないほど居るということです。それらの出会いによって私の人生はいつも喜び、生きがいに満たされてきました。

今朝は、イエス様との出会いによってその人生が一変した4人の漁師の物語を通じて<キリストから始まる人生>を送る人の幸いを一緒に味わってみたいと思います。

朗読

「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。」

マルコによる福音書 1:14-20 新共同訳

参照

ルカによる福音書 5:1-11

マタイによる福音書 4:18-22

ヨハネによる福音書 1:40-42

導入

イエス様とアンデレ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの出会いの背景について短く整理すると。

アンデレはパプテスマのヨハネの弟子だったが、イエス様についてヨハネから聞かされていた。とヨハネ福音書 1:36 にあります。「見よ！神の子羊。」

アンデレはパプテスマのヨハネがヘロデ王に捕らえられた後、漁師の仕事をしていた。ペテロは弟アンデレの紹介でイエス様と個人的に出会っていた。ヨハネ 1 章 42 節にあります。

アンデレ、ペテロの兄弟とヨハネ、ヤコブの兄弟は漁師仲間。

イエス様が 4 人に呼びかけた“人間をとる漁師”にするとはどのような意味か。

*羊飼い、農夫でも良かった、、、

人間を採る漁師の真意

エレミヤ書 16:16

「見よ、わたしは多くの漁師を遣わして、彼らを釣り上げさせる、と主は言われる。その後、わたしは多くの狩人を遣わして、すべての山、すべての丘、岩の裂け目から、彼らを狩り出させる。」

エレミヤ書 16:16 新共同訳

マタイ 13:47~48

ペテロ、アンデレ、ヨハネ、ヤコブの 4 人を人間を採る漁師にするとは…終わりの日にイエス様と共に神の国の福音を宣べ伝えて人々を神の救いに導く働きにあたらせるということ。

イエス様が説いた神の国の福音とは、

それは、「人間が自分の知恵、力、功德ではなく神の恵み、(神の子イエス・キリスト)によって神の救いに預かるという幸い。」

神の救いに預かるとは…

人が罪の支配から解放され、滅びを免れること。

人が罪の支配から解放され罪の滅びを免れるとは…

人がその創り主である主なる神との永遠の交わりに生かされるということ。

この幸いに人々に導くために、イエス様は 4 人を人間を採る漁師として召して、彼らを神の国の福音宣教の働きに遣わしたのですが。

その第一歩が、〈イエス様についていく〉イエス様に従うということでした。

何故、イエス様についていくことが、
4人の働きの第一歩だったのか？

それは、神の恵みによって神の救いに預かることは人がイエス様から始まる人生に生きることであり、イエス様についていくとは、その人生をイエス様から始めるということの象徴的な行為だからです！

ところで人がその人生をイエス様から始めなければ、どうなるか？

人は自分の願望、欲望から人生を始める他ありません。その行き着く先は、自己実現しかありません。自己実現を求める人は自分の人生を自らの欲求で満たし、自分の願う人になることを人生の目的としますかわ、そこに神の御心、神の救いはありません。そのように生き方を聖書は自分の腹が神となる！ようにものだと断罪しています。

ピリピ 3:19

「彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。」

フィリピの信徒への手紙 3:19 新共同訳

しかし、イエス様から始まる人生に生きる人は、神の願い、神の愛しみを慕い求めて生きます。その行き着くところは神の懐、永遠の神との交わりです。イエス様から始まる人生に生きる人は、神との永遠の交わりが人生の究極的な目的ですから、その人生、何があっても生きる望み、喜び、勇気を見失いません。だから、死すら恐れません。

と私はキリストから始まる人生について力説していますが、、、

残念ながら、そうでない自分がいることを知っています。正直に言うとキリストから始まる人生を生きていると自覚しているにもかかわらず、人生の苦難に意気消沈します。大声で泣きます。愚痴を言います。怒ります。虚しくなります。

そんな私が言うのも何ですが。

でも、自己実現を求める人生とキリストから始まる人生には決定的な違いがあり

ます。それは自己実現を求める人は自分の人生の重荷は自分一人で背負わなければならない、と信じているので自分で自分の悩み問題を背負えないと覚悟したとき、全てに絶望するということです。

方やキリストから始まる人生を生きる人は、人生の重荷をキリストが担ってくださり、キリストが自分に代わって生きて死んでくださるということを知っているので、生きる勇気、望み、喜びを失うことはありません。

たとえ、一時的に見失っても！

私は、そんな一人のキリスト者を知っています。私が愛してやまない私の恩師ジェームズ・

フーストン師です。

フーストン師は、48歳でオックスフォード大学の教授職を辞してカナダ、バンクーバーにリージェントカレッジを創立した。

クリスチャンが世にあってキリストにあるアイデンティティーをしっかりと証しできるための教育を成す為に。フーストン師は、現在、98歳。今もなお、現役で活躍しています。そんなフーストン先生ですが、素晴らしいキャリアと愛に満ちた家族に恵まれた一方で、悲劇としか言いようのない波乱の人生を送られたとその自伝に記しています。最初の悲劇はリージェントカレッジの新入生3人を入学式前夜に自動車事故で亡くしたことでした。次の悲劇は、孫のフィアンセが交通事故で亡くなったショックで妻リタの認知症が進み、妻の看護に専念するために数年間、休職していたのですが、その介護生活は壮絶だったようです。結局、リタの自殺未遂をきっかけで愛するリタを養護施設に預けざるを得なくなったのですが、5年前、リタが亡くなってから、以前のように働き始めておられます。

そんなフーストン師が私たち教え子にいつも語っていたことは、(自分から離れ、キリストのうちに生まれ)ということでした。その意味が、長い間わかりませんでした。いまわずかにその意味が分かってきました。その意味とはまさに今朝、皆さんにお話ししていることです。

それは、自分から始める人生ではなく、キリストから始まる人生を生きよ！ということなのです。ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネはイエス様の呼びかけに従ってイエス・キリストから始まる人生に踏み出しました。

私たちも4人と同じようにキリストから始まる人生を送りませんか。

キリストから始まる人生は永遠のいのち、自分から始まる人生は滅びです。

もし、キリストから始まる人生を知らない方がおられたら今朝、新しい人生を歩みだしませんか。

祈り